

〔資料紹介〕

## 広島大学図書館福田コレクション「紙魚日記懷紙」

藤川 功 和

はじめに

稿者が所属する広島大学図書館は、平成十八年十二月に広島市在住の福田寛氏より、氏が長年に渡って蒐集された貴重資料数十点の寄贈を受けた。広島大学図書館は、福田氏のご厚意に深謝申し上げますとともに、それら資料群を「福田コレクション」として、今後完全に活用するものである。資料は、近世の文人の書が中心で、頼山陽や沢三石といった広島ゆかりの文人の書も含まれている。書はその殆どが軸物であり、今後は館内設置の展示ケースにおいて順次公開し、館内利用者に書の魅力を伝えてゆきたい。本稿では、それら資料の中から、近世文学と関わりのある資料一点を紹介する。

### 福田コレクション「紙魚日記懷紙」について

本紙縦23・5cm×横35cmの軸物である。まず『紙魚日記』について以下『俳文学大辞典』（平成七年 角川書店）の記述を示す。

紙魚日記（ひかり） 俳諧紀行。半一。風律著。京都額田正三郎刊。

明和元（一七六四）・一二成。安芸国広島の野坡門弟の風律が、明和元年八月、郷里を出て須磨浦・湊川・住吉・逢坂関・伊勢神宮・熱田宮など名所旧跡を巡覽、大井川では「川越も四十の錢や秋のくれ」と詠み、九月四日に田子の浦に到着、富士の眺めを生涯の思い出として帰途につき、不破関跡・老曾森・鏡山などを廻って、京都・大阪に至るまでの紀行集。〔刻〕『近世芸備地方の俳諧』7（昭44・5）

〔下垣内和人〕

福田氏は、当該資料を入手した後、前掲記述執筆者下垣内氏に懐紙の写真を同封した書簡を送り、当該資料に関して所見を求められた。それに対する下垣内氏からの返信の一部を示す。

〔下垣内和人氏福田寛氏宛書簡〕

お便り拝見、嬉しく存じました。仰せの通り、風律最晩年、安永八（一七七九）年に風律が書いたものと存じます。この発句は明和元（一七六四）年に、京阪から大井川までの旅の帰路、住吉で詠んでいます。この旅のようすは『紙魚日記』と題して、京都の書肆額田正三郎から出版しています。『紙魚日記』といつても日記ではなく紀行文です。その部分を抜き出して書いたもので、「俳文」と呼ばれています。風律は『紙魚日記』から抜き出した俳文を数多く書いており、いわゆる「紙魚日記懷紙」と呼ばれるものが十点近く残っています。ご所蔵のものは、新発見の「紙魚日記懷紙」で、まことに貴重なものと存じます。

(後略)

下垣内氏の見解に拠ると、当該資料は風律の手に間違いない、また、風律には当該資料の如き『紙魚日記』から抜き出した俳文が他にも存するという。風律は、天明元年(一七八一)四月に八十四歳で亡くなっており、「風律行年八十二」に拠れば、当該資料が記されたのは、死の二年前安永八年ということになる<sup>1)</sup>。

当該懐紙は『紙魚日記』の巻末近くの住吉社社参の件にあたる。おそらく懐紙は第三者の求めに応じてなされたものであるうから、和歌の神でもある住吉社への祝意をふんだんに盛り込んである当該箇所は、第三者へ送る俳文としては誠にふさわしいものであったと推察される。

なお、当該懐紙を『近世芸備地方の俳諧』7所収『紙魚日記』(下垣内氏が頼桃三郎氏所蔵版本を翻刻したもの)と見比べる限り、本文に異同はみえない。

### おわりに

下垣内氏の記述に拠ると、風律は、頼春水とも親交があったという。頼春水といえは、今中次磨広島大学名誉教授寄贈のコレクション「今中文庫」に数点の自筆文書がみえる。それらに拠ると広島藩年寄上座に昇った今中大学(一七八四〜一八五七)が、若かりし頃春水から自作漢詩集を借りる等、文事の上での交流が伺える<sup>2)</sup>。また、大学は先述した沢三石の家から養子を迎え、藩主浅野家とも縁戚関

係を結んでいる。

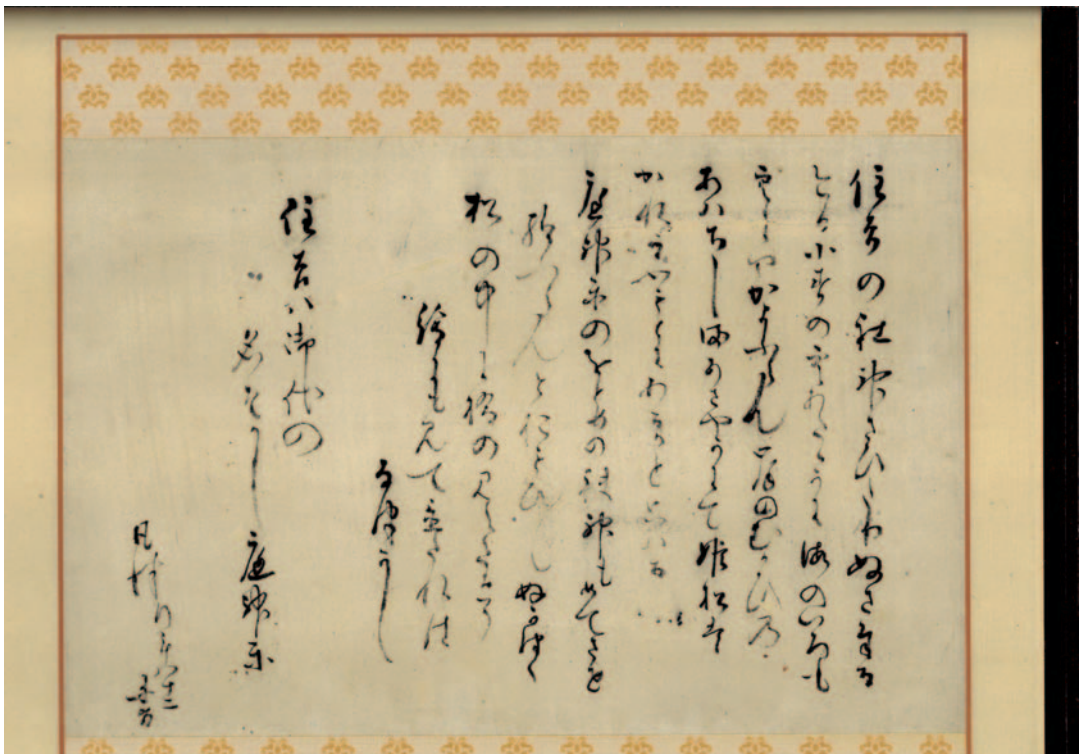
広島ゆかりの方々がそれぞれ大切にお持ちになられた資料が不思議な縁によって、今では広島大学図書館に揃って収蔵されている。それらの資料を紐解いていくと、それぞれのコレクション資料が少しづつ重なり合い、広島の間を伺い知る機縁となっている。研究開発室としては、寄贈された方々の想いをしっかりと受け止め、今後コレクションの整理と公開に努めてゆきたい。

※私信の引用を御快諾いただいた福田寛氏に深謝申し上げます。

### [注]

(1) なお、風律の十三回忌にあたる寛政五年(一七九三)に、風律の弟子汀湖らが師を偲んで建立した句碑が、東広島市高屋町白市に「鶯塚」として残っていることが、平成八年(一九九六)二月十八日付け中国新聞に掲載されている。

(2) 頼春水書簡をはじめとした今中大学資料の主なものについては、『今中文庫目録』(平成十八年 広島大学出版会)において、翻刻並びに解説を加えた。



〔翻字本文〕

住吉の社神さひたりぬさ奉る

今日小春の雲あたゝかに海のいろも

空にやかよふらん岸のむかひの

あはちしまあさやかにて姫松は

かれかふもとにあるかと思はる

庭神樂のをとめの袂神もめてさせ

給ふらんとおもひくぬかつく

松の中に橋の見えたるそ

絵にも見て置たれば

なつかし

住吉は御代の

名そかし庭神樂

風律 行年八十二  
□□

※□□は判読不能